

内観説の復権？

小島 明彦 (Akihiko Kojima)

専修大学非常勤講師

「自分自身の心的状態について知る」という意味での自己知が注目されるのは、それが他の種類の知識（世界についての／他人の心的状態についての）とは異なる、ある特別な特徴を持っているように思えるからである。いわく、直接的であり、不可謬であり、しかも自己顕示的である。ただ実際には、自分自身の心的状態について誤って理解していたということはまああるだろうし、自己顕示的であるという特徴は、たとえば直接性についての説明として提示される場合もあるため、私は焦点を、もっぱら「直接性」に絞ることにしたい。

自己知が直接的であるというのは、世界の状態や他人の心的状態について知る場合とは違い、感覚器官を使った観察による必要がない、ということである。そうした特徴を説明しようとする際に最も直観的に訴えたいのが、「内側を覗き込む」という「内観説」的な見方であろう。その時、上記三つの条件を厳密に満たす仕方では自らの（いわば「密室」の）心的領域の状態について知るという見方は、いわゆるデカルト主義的モデルと呼び得るのに対して、独立性条件と因果性条件とを満たす仕方では知るという見方は、シューメーカーに倣って「広義の知覚」モデルと呼び得るだろう。後者のモデルにおいては、自己知は、感覚器官を使った（狭義の）知覚ではないし推論にもよらないという意味で直接的ではあるものの、しかし因果的メカニズムの不調などがあり得るために不可謬ではない。

シューメーカーはこのモデルを、「自己盲人」の思考実験に基づく議論によって拒否する。すなわち、一定程度の合理的、概念的能力は持っているものの、自分自身の心的状態について三人称的な仕方ではしか知り得ない（＝「自己直知」能力がない）ような自己盲人は、自己直知能力を持つ通常人と振舞いにおいて何ら識別可能な違いを生じないのだから、自己盲はそもそも概念的に不可能である。つまり、「合理的行為者は、一階の信念を持つことにおいて二階の信念を持つ」。従って自己直知についてのこうした見方は、独立性条件も因果性条件も満たさないがゆえに、「広義の知覚」モデルを排除する。それは一種の構成説だと言える。ライトもまた別種の構成説を提示しているように思われるが、しかしいずれにせよ、私たちが自己直知を持つ際には、自分自身が実際に為すことは何もなく、しかも、それが「直接的」なものであるのは単に概念的な必然性ゆえに他ならないと考えている点では、どちらの立場も同根である。

しかしながら、そもそも、合理的主体ないし行為者ならばなぜ自己直知を持っていると看做される必要があるのか？ 仮にそれが概念的に必然的なのだとしても、ある人が現に自己直知を持っていると理解する時、私たちは一体何を理解することにな

るのか？ 自己直知を持っていると理解される本人自身は、単に他人からそう理解・容認されるだけであって、そうした自己直知を持つことによって何の影響も受けないのだろうか？ もし、それによって何らかの影響を受けることがあるのだとしたら、恐らくそれこそが、その人が自己直知を持っていると理解することによって私たちが理解することになるのと同時に、今度は私たちが自己直知を持つ際には自分自身に関係して来るかもしれない、当の事なのではないか？ 要するに、やはり自己知は何か実質的なものとして捉えられるべきなのではないか？

自己知を実質的なものと捉えながらも内観説を退ける見方を採るのが、モランである。彼は、自己知の持つ一人称権威の根は認知的直接性ではなく、(透明性条件に従うことに基づく) 実践的直接性にこそあると考えるのだが、それが「外側を見る」モデルであることは明らかだ。ただし、彼はその際、認知的直接性という側面があることは否定していない。それどころか、その意味での直接性を認め、かつ、それが(他人の信念について知る場合や、自分の信念について単に認知的に直接的な仕方でのみ知るような場合には成立していない) 実践的直接性とは区別され得ると考えたからこそ、認知的直接性を一人称権威の根とは捉えないのであった。

だがそうだとすると、内観説を拒否する彼は、認知的直接性をどのように説明するのだろうか？ また、一階の信念に対して直接的な実践的スタンスをとっていながらも、透明性条件には従わない場合もあると思われるが、その場合、当の信念に対するアクセスについてはどのように説明するのだろうか？

私は、そこで敢えて、モランに対してある種の内観モデルの導入を薦めたい。だがもちろん、その際には飽くまでも、一人称権威の根は実践的直接性にあり、そしてそれはいかなる意味でも単なる内観によっては成立し得ない、という見方は保持したままである。それによって、恐らくデカルト主義は免れ得るだろう。その際の「内観」とは、「広義の知覚」モデルにおけるような独立性条件は満たすものの因果性条件は満たさず、代わりに、一階の信念に対して「注意を向ける」、あるいはそれこそ「意識的になる」という条件を加えたものとなるだろう。